ロック・アウトをは

鉱長に会わせろ！

組合は会社側のロック・アウト準備をはねのけて、部分ストを行うため緊急大衆動員をおこなつた。各地域分会から主婦会員をふくむ約一〇〇〇名が動員され、表門約三〇〇名、裏門約一五〇名、北門約一〇〇名、安全灯室約一〇〇名、坑口約一〇〇名、会社側の作戦本部である鉱長室に約一五〇名がそれぞれ配置され、午後七時ごろには一応のピケ体制をかためた。午後八時ごろバリケード用材をつんだ白石組のトラック三台で裏門、北門にそれぞれバリケード築構にやつてきた。北門ではピケ隊の抗議と説得でバリケード築構

【四山】十四日各地域分会単位で四山支部では十三カ所にわかれ、主婦会員をふくめた約五〇〇名が期末手当到達要求獲得の決起大会に参加した。

そのころ会社側は、毛布などの寝具、食糧品、バリケード用材などを鉱長室らのTWI室付近に搬入していた。それと同時にロックアウト中の保安対策として、会社幹部による保安要員の準備や、業務命令の郵送など保安対策を講じていた。

この様な会社側の不当なロックアウトと対決して、部分ストを決行するため午後四時、職場委員、地域分会長、主婦会分会長を緊急招集して、午後五時から対策を検討した。こうして組合が部分スト決行の準備をすすめているとき会社側はさらに、午後六時半ごろから正門、北門、南門の各門付近にロツクアウト公示を掲示しはじめた。また一方安全灯室では部分ストをさまたげるための安全灯対策を講じていた。それを知つた組合は、急遽行動隊を動員して、小ぜりあいのあと会社幹部を説得し、安全灯室に行動隊を中心にしたピケをはつた。そのあと、各門にたいする会社側のバリケード築工をピケによつて阻止した。

そのころは夜もふけて、燃えさかるかがり火が夜空をいろどり、祭りにみちたピケ隊の顔をあかあかとてらしていた。午後十時ごろには表門約一〇〇名、北門約八〇名南門約二〇名、総数約二〇〇名がピケについていたが、各地域から追加動員されたピケ隊がぞくぞくと結集し、午後十二時ごろには総数約一五〇〇名にたつしていた。

わつて港務支部から約二五〇名がピケ支援にかけつけてきた。いよいよ一番方の就労がちかまつた午前四時すぎ、会社側はふたたび正門を閉門しようとした。しかし、港務支部の支援ピケ隊と四山支部行動隊の力で閉門はさせなかつた

（写真右・上から四山では分会旗先頭に就労・四山を激励する港務支部ピケ隊・製作支部の主婦は宮浦を激励）

拍手と歓声で就労

十五日朝、午前五時少し前いよいよ一番方の就労である。冬曇りのまだ真暗な朝、一番方入坑者とそれをはげましにかけつけた組合員と主婦で正門前は埋めつくされた。やがて整然と並んだピケ隊の人垣の間を職組を先頭に一番方の就労である。不当なロックアウトを排除して、自らの職場に働きにいく姿が雄々しいばかり。

一番方、常一番、坑外関係の順に拍手とはげましの歓声におくられて、午前八時ごろまでに就労を完了した。会社側は何事かをマイクで放送している。おそらく〃ロックアウト中だから就労しても賃金

いたい〃とピケ隊に相談にきたが説得によつて閉門はさせなかつた。午前十二時三十分ごろから午後二時ごろまでにかけて二番方の就労がおわり、常一番上りの激励支援隊、大牟田市教組、自労三川分会の激励デモ隊と正門前で交流をおこなつている最中、鉱長室やTWI室などに詰めていたと思われる入坑準備をととのえた会社幹部十数名が入坑しようとした。それを察知したピケ隊は急遽坑口に動員〃坑内は指名スト突入者を除いて平常通り就労しており、保安も十分確保されているので保安上の心配で入坑する必要はないのではないか〃という説得の結果入坑はしなかつたが、今度はハイヤー四台に分乗した坑内衣の会社幹部二十名が正門から入門しようとした。しかしこれもピケ隊の説得によつてそのままひきかえした。

午後九時から十時ごろにかけて三番方も一番方、二番方とおなじく問題なく就労して翌十六日朝スト解除までかがり火をたいてのピケがつづけられた。

デモ隊はただちにピケの配置につく。つづいて銀水社宅を主力にした第二次激励デモ隊が約三百名動員された。夜中の動員ではあつたが、九十五％の参加をみた。なかには、この日欠勤していた人たちも、動員には率先してかけつけるなど組織あげてのもり上がりをしめした。第二次激励隊は午後十一時に第一次隊とピケを交替、いご翌朝五時四十分のスト中止、ピケ引揚げまで徹宵の警戒にあたつた

半数以上を動員
入替採用者先輩に負けず闘う

【港務】十五日一番方から部分スト突入の指令が発令され、急速にかわつた事態にそなえるため、十三日支部委員会で対策を検討し、十四日には各地域分会ごとに決起大会をひらいた。

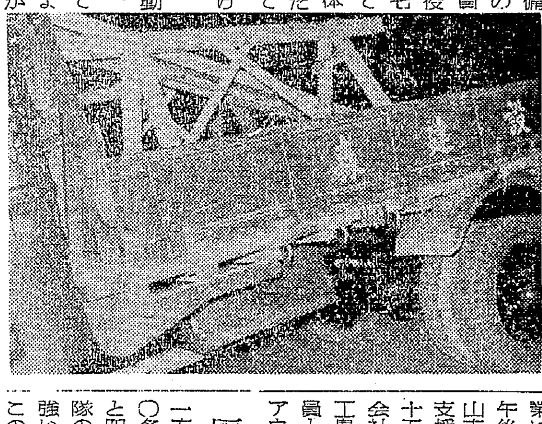
十四日、ひるごろには鉱業所関係のロツク・アウト準備が表面化しはじめたので午後三時、職場委員、地域分会長、主婦会役員を緊急招集、午後七時から会議をひらいて緊急動員体制と警戒体制の確立を検討後、ただちに各地域に散つて闘争体制をつくりあげた。

ヤマではもうすでに動員がはじまつている。各分会ではじつとしているのがもどかしいような気持をおさえながら、自宅で待機していた。

十五日午前二時動員がかかつた。四山支部ピケ支援として、新港、臼井、平井、四山、南社宅の各地域分会から二五〇名が動員されたまたたく間に二五〇名が集り四山支部にかけつけ、四山支部の統制下にはいつて正門前のピケについた。

ちようどそのとき、若干名の会社側が正門をしめようとところみたが、ピケ隊はなんなくそれをハネ返した。こうして支援ピケ隊は夜を徹してピケにつき、一番方の就労を見さだめて六時すぎ一応解散した。

さらに十五日の一番方上り約一五〇名、常一番上り約一五〇名、残業をしていた常一番約一〇〇名が午後四時すぎから三班に分れて四山支部に激励支援にかけつけた。支援ピケ隊は各門のピケのほか、十五日三時ごろ入坑しようとした会社幹部十数名の説得や、第二人工島竪坑のピケなど四山支部組合員と力をあわせて不当なロツク・アウトと闘つた。



歴史的大動員

一方、主婦会は、十五日午後六〇〇名を動員、二隊にわかれて三川と四山に激励デモをおこない、各隊の責任者支部長、副支部長が力強い激励をおくつた。

このように組合員の半数以上を緊急動員したことは、歴史的なことであり、一番方出勤の組合員からも執行部に〃動員の必要はないかあれば仕事がすめばすぐにかけつけるから〃と電話がかかつてくるありさまだつた。

四山のピケに参加した組合員は、四山鉱に会社側保安要員として入坑しようとした会社幹部のなかに港務所の部課長らがいたことで憤激をあらたにしていた。

また、十五日、はじめて支部に出勤した入替採用者も組合教育をうけたあと、先輩たちとともにハチマキをしめて動員に参加、意義ぶかい初出をかざつた。

こうして、港務支部は直接ロック・アウトこそうけなかつたが、ロツク・アウトをうけたヤマの仲間たちとともに闘い、積極的な意欲をもやした。

前夜から泊込む
会社・部屋には全部錠を

【本所】ロツク・アウト通告の前日十二月十三日、本所支部では緊急闘争態勢確立のため行動隊班長以上を招集、また別に地域分会長と委員を招集して闘争の機構を確立しながら十四日の決起大会にのぞむことになつたのである。

翌十四日、宮原地域分会が午前十時から総決起大会をひらいたのをはじめとして、他分会も午後一時から一斉に開始した。大会は緊迫した事態を反映して異常な空気のもとにひらかれ、大会終了後地域分会長、委員の合同会議が非常招集され、あわせて行動隊の班長以上も招集、当面の情勢が執行部から報告された。

ここでロツク・アウトにたいして強行就労、職場の確保、地域闘争本部の完備を話しあつた。行動は直ちに開始され、委員は夜遅くまで連絡に走り深夜二時すぎにまでおよんだ。他方、職場確保のため中央倉庫などは前夜から行動隊を中心に泊りこみをやるなど、ヤマの職場と違つて職場が九十八カ所にまたがるため、ピケ隊の分散など職場確保も困難をきわめた。

まず、安全灯確保の必要はないためこれに替つて門の確保にあたり守衛と連絡、最も難しいような所を守つた。

トラックと共に門を開放

十五日、今日は強行就労の日だ。各職場をみて極端にもめた所はなかつたが、まず輸送課ではこの日が給料日のため、賃金支払いの車を出さねばならぬ。委員は午前六時前には組合員とともに職場に集つた。七時までに入門していないと会社が内部で錠をかけたらそれまでである。案の如く会社は車の出門を拒否した。だが、すつたもんだの末、三台を裏門から出させた。

問題は本館であつた。会社がここに主力を注いでいるのを察知して執行部では早朝六時にきてみると会社幹部が五、六名いる。六時三十分ごろ警察から十名ほどきた。つかつかと構内に入ろうとしたので、後に続いて執行委員が入つたところ、警官はこれに文句をつけ追い出しにかかつた。執行委員は、警官たちと喧嘩しても仕方がないと摩擦を避けたが、後になつて警官が謝つた一幕もあつた。

説得で入室

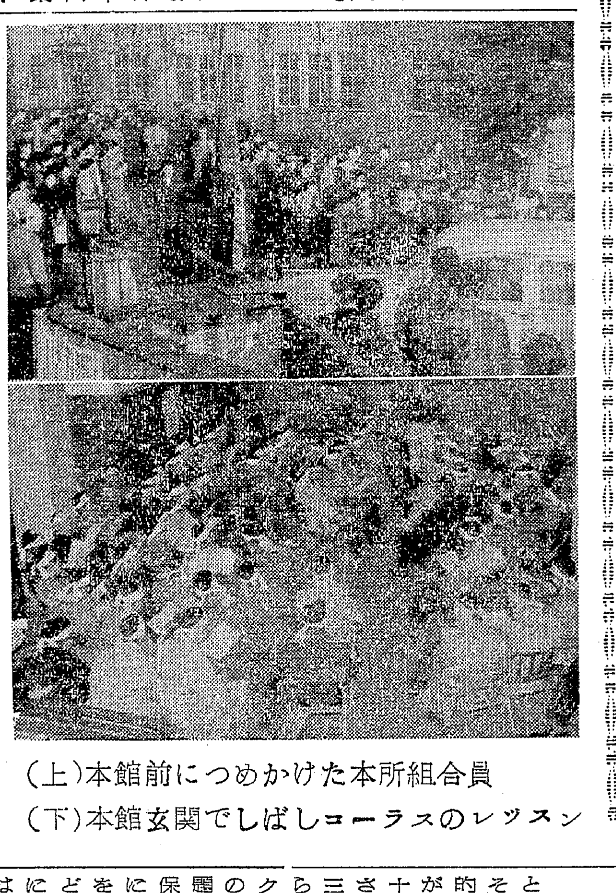
七時前になると組合員がつぎつぎにくる。組合の狙いは、給料運びのトラックが門を入るときに、ここを確保する手筈である。こうして東門は何なく確保できたが、玄関の門は会社が頑強に開けようとしない。組合員は玄関からでないと入らないと拒否したため、経理部長は給料支払いが遅くなつているので、何とかしてくださいと頼んだがこれを拒絶した。たまたま四山の車に警官が便乗していたため、運転手まで下車して、車を外に出さぬとこぜりあい、警官も下車させられ、玄関の扉もあけさせることになつた。ただちに執行部と行動隊で門を開放、会社からの抵抗もあつたが紛争はなかつた。本館の各部屋には残らず施錠してあつたが、各部屋で委員を中心に行動し、結局代表者交渉で室を開くことができ、本館の職場は完全に確保したわけである。

本館に泊り込み

十五日夕刻、この日は全職場が三分の一は必ず残つて職場確保をすることにしていたが、少い所で半数、多い所は全員が職場に泊りこみ、労働歌の合唱など行い、気勢をあげた。この日、本館に泊りこんだ数は約一四〇名、昼間は暖いとはいえ夜は急激に底冷えするので、ボイラーを焚いて仲間を暖めた。

また、本所の現場では女子組合員たちが十五日夜は十一時近くまで残りお茶をわかしたりして、頑張り男性を感激させた。

こうして各職場の就労は困難をおかして、成功のうちにおこなわれ十六日のスト中止を迎えたのであつた。



（上）本館前につめかけた本所組合員
（下）本館玄関でしばしコーラスのレッスン

各坑口で激励
大地評も二千四百を動員

【大地評】一方、大地評では三鉱の険悪な情勢に対処するため、十四日午後七時緊急に電報で各単産の委員長、執行委員の会議招集をおこない、三鉱の実態の説明を受け、共闘態勢を確立するための具体的な検討をすすめた。その結果当日各単産の代表者を最低一名あて事務局に常駐させるとともに、午後十時半から十二時半にいたる約二時間あまり三鉱ニユースカー〃はたかぜ〃と三染〃あかつき〃号に分乗して、各坑口でピケを張つている三鉱組合員やその家族を激励し、こんどの共闘態勢を確立する決意をあきらかにした。

翌十五日、各単産はできる限りの動員をおこない、各坑口のピケ隊にたいして交流デモを実施、激励にかけ参じた。この日の動員数は三染六十名、東圧、合成三百名、教組二百名、自労五百名、三棟五十名、市労連二十名その他各単産からもぞくぞく動員、延べ二千四五百名が坑口激励をおこない、その活動のなかで大地評という組織の認識と、地評傘下の組合員、家族の闘いを共闘の場によつて強めて行かなければならないという意識が強化されたであろう。

四山に激励する教組

更に闘争態勢強化を
闘いはつづけられている

こうして、三日二晩にわたつて組織の全力をあげて闘つた不眠の闘いのなかには数多くの教訓と反省点がふくまれている筈である。そのすべてをあきらかし、明日の闘いの糧としなければならない。組合員と主婦会員のひとりひとりが自らの行動をふりかえつてそれをたしかめると同時に、組織的にも闘いのあとを点検する必要がある。

十六日朝、ロック・アウトは解除され、一応平常に復帰しているが三鉱連の場合はまだ闘いはつづけられている。機関としてまだロック・アウトをめぐる三日間の闘いの総括をしたわけではないが、問題点をあげると、例えば会社側の保安要員が急遽東京本店からヤマにつめかけてきたことや、安全灯をめぐる問題、業務命令の問題など会社の攻撃態勢を察知し、それに対処する行動は必ずしも十分とはいえず、警戒態勢の不十分さがあつただろうし、また大衆動員についても、あれだけぼく大な大衆の力を結集することができた組織力を基礎にして、さらにそのエネルギーを有機的に活用する配慮の余地がないとはいえないだろう。

とにかく、こんどのロック・アウトとの対決にしめされた主婦会をふくめた組合の組織力には異様なまでに大きなものがあつた。この力をさらに発展させて、すでにはじまつている〃会社再建との対決〃を果敢に闘いぬいていかねばならない。